
【年次報告】

制度的なものとしての DG-Lab

西川 耕平

2020年の春に初めての緊急事態宣言が発出されてから、すでに2年以上が経った（この原稿は2022年8月に書いている）。DG-Labの研究会も2020年の5月以降はオンラインツールを用いての開催が常態化することとなった。

この環境の変化は、私個人にとってはラボとの関わりを深める大きなきっかけとなった。コロナ禍の始まる前、ラボの研究会は基本的に関西で開催されていたため、関東在住の私にとっては気軽に参加のできない会合だった。それが、自宅に居ながらにして議論に加われるようになったのである。もちろん、研究会の後に二次会を開けないことには一抹どころではない寂しさを覚え続けているが、画面越しであろうとドゥルーズとガタリの哲学や思想について様々に語り合うことの愉しみに変わりはない。

そういった次第で研究会に継続的に参加するようになったのだが、気が付いたら2022年の3月からは執行部の一角を占めることになっていた。それまでの得能、佐原、内藤の三名から、平田、内藤（※留任）、西川の体制となった。こういった会の運営役に携わることはあまりなかったためやや不安ではあるものの、ラポルド病院でガタリの無茶振りにおそらくはかなり悩まされていたと推測される職員に比べれば、だいぶマシだろうという気にもなる。

そして、運営側に回ってみるとそれまでは見えてこなかったものも見えてくる。私は最近、このDG-Labを「制度」の一例と考えることができないかと思うようになった。ここで「制度」という言葉を綿密に定義することはしないが、ガタリ的な側面を強調すれば「集団的」だとか「横断的」といった要素をその構成要件として考えることができるだろうし、ドゥルーズ的には禁止や制限を退ける「肯定的な企て」を実現する場として捉えることができるだろう。ドゥルーズとガタリは「シメール」という雑誌を共同で編集していたこともあったが、そうしたことも制度的な試みの一つとみなすならば、この会誌『hyphen』もそれと同様なものと考えてよからう。

会誌については脇に置いておくとして、いわゆるアカデミズムの内部にその身をおいているのではない市井の方々が研究会に

定期的に参加していることは、このラボが大学という制度とは異なる横断的で集団的な制度であることを示している。また、ラボ発足の動機である「ドゥルーズとガタリに関心をもつすべての人々が継続的に集まり、議論を交わすことのできる場を設ける必要がある」という考えを、このラボを駆動する理念と捉えるならば、現状、不十分ではあるものの一定程度その肯定的な企てを実現することができていると言ってよさそうである。

不十分な点としては、何らかの仕方でも大学に身を置いているメンバーの割合がそうでないメンバーに比べて高いことや、研究会において専門知を有する人の発言がどうしても重視されてしまうといったことが挙げられるだろう。さらには、「ドゥルーズ・ガタリ・ラボラトリ」という名を冠するにもかかわらず、ドゥルーズ研究者に比してガタリ研究者のメンバーが少ないこともラボの抱える問題として意識させられる。

しかしこの最後の点に関していえば、2021年はラボの発足以来、ドゥルーズでもなくドゥルーズ＝ガタリでもなく、ガタリに関わる研究発表が最も多い年であった（7件中3件）。その再評価が進み、2022年3月にはガタリを対象とする本邦初の論集が刊行されるに至ったことをあえて考慮から外したとしても、ガタリに主軸を置く参加者が増え、研究会の内容がより多様化することは、ラボの看板をまっすぐ立てるためにも、この上なく望ましいことである。

2021年はドゥルーズとガタリの芸術論をテーマとしたためもあってか、読書会の内容も多様で、色々なテキスト（『ブルーストとシーニュ』、『襞』、『無人島の原因』、『消尽したもの』、『カオスモーズ』、『哲学とは何か』）に触れる機会を得られた。芸術それ自体についてももちろんのこと、芸術と哲学の関係や芸術のアクチュアリティについてなど、進行担当者のテーマ設定を受けて、様々な議論を交わすことができた。その意味では、2021年の研究会は総体的に見て横断的であったとすることができるのではないかと考えている。

すでに2022年も半分をすぎ、本年は刊行50周年となった『アンチ・オイディプス』を読み継いでいる。50年前の本なのでも

はや「現代思想」ではなく「古典」と言った方がよい気がするが、それでもなお同書を読む現代性（アクチュアリティ）は失われていない。個人的にはそうした直観を抱いている。しかし、いくら読んでも慣れきることのない彼らの難解な文章に単独で向き合うのは骨が折れる。だからと言うわけではないが、集団で多方向に折れ曲がりながらテキストの理解を深めていくこと、その思想を拡げていくことが重要なのである。

2021年活動記録

第36回 DG-Lab 研究会

【日時】2021年1月23日(土) 14:00-17:30

【使用アプリ】Skype

【読書会】ジル・ドゥルーズ『ブルーストとシーニュ』第二部 結論(進行:内藤慧)

【研究発表】佐々木晃也「純粹に光学的な世界」とは何か:第三のスピノザ論について

第37回 DG-Lab 研究会

【日時】2021年3月13日(土) 14:00-17:30

【使用アプリ】Skype

【読書会】ジル・ドゥルーズ『巖』第九章 新しい調和(進行:佐原浩一郎)

【研究発表】平田公威『『哲学とは何か』における人間諸科学の位置と意義について』

第38回 DG-Lab 研究会

【日時】2021年5月15日(土) 14:00-18:50

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ「無人島の原因と理由」(進行:得能想平)

【研究発表1】有馬景一郎「ガタリの『分裂分析的地図作成法』における「四機能素」について

【研究発表2】山森裕毅「スキゾ分析と反-精神医学」

第39回 DG-Lab 研究会

【日時】2021年7月3日(土) 14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ「消尽したもの」前半(『消尽したもの』白水社、7-24頁)(進行:佐原浩一郎)

【研究発表】尾谷奎輔「「存立性」概念を基軸としたフェリックス・ガタリにおける存在論の形成」

第40回 DG-Lab 研究会

【日時】2021年8月28日(土) 14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】フェリックス・ガタリ『カオスマーズ』「7. 生態哲学(エコゾフィー)の対象(後半)」(進行:香川祐葵)

【研究発表】西川耕平「ドゥルーズの講義録にみられる研究と教育の実践」

第41回 DG-Lab 研究会

【日時】2021年11月20日(土) 14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ+フェリックス・ガタリ『哲学とは何か』第七章 被知覚態、変様態、そして概念(進行:平田公威)

【研究発表】立花達也「ドゥルーズのスピノザ解釈における最も単純な物体をめぐる論争:リヴォーとゲルーへの応答を中心に」